

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 25 日現在

機関番号：32690

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21500263

研究課題名（和文）＜事態把握＞から見た日本語話者の「語り」と「読み」

研究課題名（英文）How Japanese Native Speakers Narrate and Read the Japanese Language  
—from the Viewpoint of “Subjective Construal” —

研究代表者 守屋 三千代（MORIYA MICHIO）

創価大学・文学部・教授

研究者番号：30230163

研究成果の概要（和文）：本研究は、日本語話者の＜事態の主観的把握＞の傾向が、「語り」と「読み」という行為においていかに反映しているか、その在り様を捉えるとともに、＜事態の主観的把握＞の反映としての「ナル表現」をはじめとする言語表現や文法・語彙などの諸相を、認知類型論的な観点から捉えるものである。これらの研究成果は、国内外においての＜事態把握＞の研究の促進と日本語教育・国語教育の改善の一助となると同時に、今後、文化記号論に向かう研究の基礎をなすものであると考えられる。

研究成果の概要（英文）：We investigated how Japanese speakers try to narrate and read the Japanese, influenced by their ways of “subjective construal”. Also we studied the various phases of the usage of “*naru*” and “*naru*-expressions” from the viewpoint of cognitive typology. These studies might expedite the study of “construal” in Japan and other countries, and improve the method of teaching Japanese as both a foreign and a native language. In addition, this research would contribute to the foundation for the study of cultural semiotics.

## 交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2010年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2011年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：情報学

キーワード：認知言語学・事態把握・日本語話者・語り・読み・見え・自他合一性・聞き手責任性

## 1. 研究開始当初の背景

この時期は認知言語学において＜事態把握＞および＜事態の主観的把握＞の概念に注目が集まり始めた時期にあたる。当時は、母語話者すなわち日本語話者を中心に＜事

態把握＞の観点から考察を進めようという方向性は、さほど明確に打ち出されておらず、＜主観的把握＞の傾向に基づいて、日本語話者がいかに語り、読むかという本質的な研究もほとんど始められていなかった。ただし、

日本語を相対的に捉えることが求められる日本語教育の分野では、日本語話者の〈主観的把握〉の傾向と、学習者の〈事態把握〉との相違を理解することが有効なヒントとなることに注目が集まるようになり、〈主観的把握〉の概念を援用することにより、日本語の自然さの要因とともに、日本語を特徴づける文法現象を統一的に説明する試みが行われるようになった。こうした研究を経ることで、〈主観的把握〉という志向性に基づいて、日本語話者がいかに語り、いかにそれを読むかということと、〈主観的把握〉と既に指摘されていた「ナル的言語」であることとの相関性への本格的な研究が求められるに至る。前者については、当時は具体的なテキストを語りだす過程に〈主観的把握〉を位置づける試みは十分にはなされておらず、ましてや、読み手の立場に着目した研究は、ほぼ手つかずの状況にあった。これに関連して、日本語母語話者が何歳くらいから〈主観的把握〉の傾向を持つに至るか、また、異なる〈事態把握〉の言語話者の場合はいかに語り、読むかという研究や、母語話者の認知言語学的な発達の観点からの研究も、報告がなかった。後者については、〈客観的把握〉の傾向のある英語を中心とした対照研究にほぼ留まり、日本語以外にはどのような「ナル的言語」があり、どのような「ナル表現」を実現しているか、日本語の場合とどのような相違が見られるかなどの、具体的かつ認知類型論的な研究はほとんど着手されていなかった。このように、〈主観的把握〉の認知的行為である「語り」と「読み」の研究や、〈主観的把握〉の反映としての「ナル表現」をはじめとする言語形式の現れた方の総体については、十分に研究が進められていない状況にあった。

## 2. 研究の目的

上記1をふまえて、本研究は日本語話者の〈事態の主観的把握〉が、どのような認知的行為を志向するか、特に文学の語りと読みの過程を考察するとともに、日本語話者の読み手責任性を明らかにすることを最初の目標とした。これに関連し、日本語話者の〈主観的把握〉の傾向が児童・生徒においてどのように見られるかを調査・分析することも視野においた。さらに、こうした〈主観的把握〉の傾向が、日本語の文法や語彙などの言語形式と体系に、いかに反映されるかに注目した。特に、〈主観的把握〉と「ナル表現」との相関性を取り上げ、日本語および「ナル相当語」を持つ韓国語やトルコ語、さらに〈客観的把握〉の傾向を持つ英語や中国語とも対照しながら、「ナル相当語」と「ナル表現」の用法を調査・考察して、〈事態把握〉との相関性を分析し、さらに認知類型論的な研究を進めることを目標に掲げた。あわせて、〈主観

的把握〉の傾向が、「ナル表現」以外にもいかに日本語の形式の隅々に反映されているか、これまでの成果と並行して考察を進めることとした。最終的には、〈主観的把握〉の傾向の「語り」と「読み」としての具体化、および「ナル表現」などを中心とする言語現象への反映の仕方との相関を、明らかにすることを目標とした。

## 3. 研究の方法

(1) 近現代の小説全集より文章の冒頭の段落を電子データ化し、それに基づく調査・分析を行って、それらが〈主観的把握〉に基づいた独話的な語りとなっているか、読み手の臨場・自他合一的な読みを誘っているかを分析して、いかに「語り」と「読み」が効果的に完成するかを考察する。

(2) 日本語母語話者および非母語話者を対象に、すなわち、小中学校の児童・生徒と、日本・中国・韓国・トルコの大学生に対して、歌詞や小説の冒頭および画像をいかに読み、理解しているかを調査・分析する。回答に際しては言葉と絵を描くことを自由に選択してもらい、理解内容が言語と仮定の映像とどのように結びついているかも調べる。

(3) 〈主観的把握〉の言語形式的指標の一つである、動詞「ナル」および「ナル表現」を取り上げ、国内外の研究協力者とともに、インタビューやアンケート調査を行いながら、「ナル」と「ナル相当語」の意味と用法の拡張の仕方を〈事態把握〉との相関において分析する。また、シンポジウムやワークショップを開き、論文などにまとめることで情報を共有し合い、さらに考察を深める。

## 4. 研究成果

### (1) 主な成果

はじめに、日本語教育・学習の分野において、日本語話者の〈主観的把握〉の志向性と〈客観的把握〉との相違の理解が不可欠であること、その際に「見え」をイメージ・スキーマとすることの理解が肝要であることを指摘し、〈主観的把握〉が文法形式にいか具体的に反映しているか、その統一的説明を試みて、当時の共同研究者とともに日本語教育に寄与すべく、書籍を刊行した。

「語り」と「読み」の研究に関しては、日本語話者の〈事態の主観的把握〉の傾向が、これらの認知行為に顕著に現れていることを明らかにし、口頭および論文で発表した。例えば、小説の冒頭では、語り手は〈主観的把握〉の傾向のある読み手を想定し、そうした読み手を文章という事態に引き込む工夫、すなわち、〈主観的把握〉のままに独話的に語り出す仕方を行っている。こうした工夫が効果をあげるのには、語り方だけでなく、読み手が文章という事態に主観的に臨場し、自他

合一的に読むという主体的な読みが条件となっており、この点で日本語の小説などの語りが読み手に読み手責任的傾向、つまり読み手に文章という事態への〈主観的把握〉を期待し、それに依存していると同時に、そうした読みを促す語りを行っていることを示した。それとともに、こうした読み手責任性が和歌や俳句をはじめとする韻文のジャンルの読みと伝統の維持を可能にしていることを指摘し、〈主観的把握〉が日本文学の「語り」と「読み」を大きく支えていることを示した。こうした語りと読みを具体的に下支えするものは、語り手と読み手が「見え」と呼ぶべき視覚的イメージとその共有にあることもわかってきた。日本語話者がここで言う「見え」を浮かべやすいという傾向は、日本の児童・生徒および大学生に対する読みの調査結果からも明らかである。彼らの調査結果には「見え」の言語化・説明に際して、画像を伴うケースが多く、極めて視覚的な情報とともに事態を理解・鑑賞している様子が見られる。この点は、「見え」が日本語話者の〈事態把握〉において重要な位置を占めることとともに、「見立て」という認知行為に発展する可能性も示唆している。

次に、〈主観的把握〉の反映としての「ナル表現」をめぐる、認知類型論的考察を進め、口頭・論文での発表を行った。日本語と同様に、トルコ語・韓国語などでも「ナル相当語」があり、「ナル表現」の発達が観察されるとともに、英語や中国語など〈客観的把握〉の傾向のある言語の場合との相違も明らかに観察された。ここにおいて、〈主観的把握〉の傾向と「ナル的言語」であること、さらに膠着語であることの、基本的な相関性が観察されたと思われる。ただし、「ナル表現」によって人間の行為を現象化することを志向するのは、日本語とトルコ語において顕著であるが、韓国語はその点で相違が見られ、また、日本語話者において顕著に観察される「見え」に関しても、韓国語においては今回の調査では観察されなかった。ここにおいて、〈主観的把握〉の傾向が見られ、「ナル表現」が一定程度発達している言語でも、個々の〈主観的把握〉の在り方も、言語形式への反映の仕方も異なることがわかり、今後に向けた大きな課題を残した。なお、「ナル表現」以外の言語形式では、日本語話者が「見え」や「見立て」に向かう特性に着目することにより、例えば複合動詞や語順においても〈主観的把握〉との相関性があることがわかった。

以上、日本語話者の〈事態の主観的把握〉の傾向は、言語を発する際の認知的な営みであり、「語り」と「読み」に端的に反映するとともに、話し手を取り巻く環境の認知や自身の身体性に深く関わることで観察された。この場合の認知とは、常に「見え」と呼ばれ

る視覚イメージを伴う傾向があることが明らかとなったが、この点は視覚に訴える文化的表象の創造や受容の際にも通じるものであることを示唆する。ここにおいて、〈主観的把握〉に裏打ちされた、「語り」と「読み」の在り方は、視覚に訴える創造と、視覚的な理解・鑑賞の在り方に通じるものと推測され、今後、文化記号論的研究を進めていく上での有効なヒントを得た。

## (2) 国内外のインパクト

国内における〈事態把握〉の研究を進める上での一助となったと考えられるとともに、現在、PISA型読解に急速に傾きつつある国語科における読解の考え方に、日本語話者に固有の読みが存在することをデータとともに提示することができたと考えられる。

中国やトルコなどの海外の日本語教育の分野においては、本研究のような研究発表・講演に関心が寄せられたが、これは日本語教育における認知言語学的な考え方の有効性が認められ始めたことと、〈事態把握〉をはじめとする認知言語学への理解が拡大したことの現れだと思われる。中国では、日本語研究や日本語教育の分野を視野に入れた認知言語学をテーマとするシンポジウムが数多く開催されるようになり、またトルコでもトルコ語話者による〈事態把握〉をめぐる認知類型論的なシンポジウムが開催されて、認知言語学に基づく研究の有効性が検討・確認される動きが出てきた。こうした動きに、本研究は何らかの貢献をすることができたのではないかとと思われる。

## (3) 今後の展望

本研究は〈事態把握〉をめぐる研究の大枠を捉え、今後の方向を模索することに主眼を置いてきた。ただし、〈事態把握〉の研究はあらゆる言語話者を対象とすべきものであるとともに、日本語話者の〈主観的把握〉一つとっても未解決のことが数多く存在し、さらなる研究に向けて、課題は膨大にあり、今後も研究を拡大していく必要がある。

同時に、〈事態の主観的把握〉という日本語話者の認知的行為の志向性は、言語だけではなく文化的表象の創造と受容に深く関わる可能性がある。本研究は、その場合に立脚すべき地点は、日本語話者の身体性の問題とともに、視覚イメージに大きく依存した「見え」という捉え方、および、さらに主体的なイメージ・スキーマとして機能すると思われる、「見立て」という認知的行為にあると考える。これは、今後の文化記号論的研究の方向性を示唆するものであるとともに、〈事態把握〉の本質的な研究を進める上においても、必須の視点ではないかと考える。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

### (1) [雑誌論文] (計 23 件)

- ① 守屋三千代、現代日本語の「ナル」と「ナル表現」—〈事態の主観的把握〉の観点より一、日本認知言語学会論文集、査読有、第 11 号、2011、559-582、
- ② 高山京子・守屋三千代、国語科教育の課題—〈事態の主観的把握〉に基づく読解教育と PISA 型読解教育の狭間で—、日本認知言語学会論文集、査読有、第 11 号、2011、533-539、
- ③ 池上嘉彦、日本語と主観性・主体性、ひつじ意味論講座 主観性と主体性、査読無、第 5 巻、2011、49-67
- ④ 池上嘉彦、日本語話者における〈好まれる言い回し〉としての〈主観的把握〉、人工知能学会誌、査読有、26, No. 4、2011、317-322、
- ⑤ 池上嘉彦、話者による〈事態把握〉(construal)の営みの相対性と翻訳—日本語話者好みの〈主観的把握〉をめぐって、文体論研究、査読有、58 巻、2011、91-104、
- ⑥ 守屋三千代、広告における受益可能表現—〈事態把握〉の観点より一、創価大学日本語日本文学、査読無、第 21 号、2010、19-32、
- ⑦ 守屋三千代、テキメン・アイシェヌール、高山京子、「私たち」の〈事態把握〉と「語り」—「語り」の空間の構築と共有—、日本認知言語学会論文集、査読有、第 10 号、2010、723-735、
- ⑧ 池上嘉彦、守屋三千代、テキメン・アイシェヌール、「ナル表現」再考—膠着語における事態の〈主観的把握〉の観点から、日本認知言語学会論文集、査読有、第 10 号、2010、366-369、
- ⑨ 池上嘉彦、(事態把握)の相対性をめぐって—西欧における二つの先駆的な研究、日語学習と研究、査読有、150 号、2010、1-6、
- ⑩ 池上嘉彦、日本語話者における〈好まれる言い回し〉としての〈主観的把握〉、日本語文化研究、査読有、第 8 輯、2009、1-6、
- ⑪ 守屋三千代・高山京子・梁爽、〈イマ・ココ〉にこだわる日本語話者の『語り』、日本認知言語学会論文集、査読有、第 10 号、2009、575-590
- ⑫ 池上嘉彦、認知言語学における〈事態把握〉、言語、査読無、10 月号、2009、62-70、
- ⑬ 池上嘉彦、日本語の〈主観性〉をめぐって、日語学習と研究創刊 30 周年記念号、査読無、2009、11-18、
- ⑭ 守屋三千代、複合動詞を事態把握から考える、清華大学、日本学国際フォーラム『日本語動詞とその周辺』論文集、査読有、第 10

号、2009、68-78

⑮ 守屋三千代、「日本語教科書に現れた〈事態把握〉—日本語話者はいかに語り、コミュニケーションを目指すか—」、創価大学日本語日本文学、査読無、第 19 号、2009、左 21-35

### (2) [学会発表] (計 42 件)

- ① 池上嘉彦、話者による〈事態把握〉の営みの相対性と翻訳—日本語話者好みの〈主観的把握〉をめぐって、日本文体論学会創立 50 周年記念 (第 100 回) 大会、2011 年 10 月 22 日、関西外国語大学、
- ② 守屋三千代、認知言語学から見た複合動詞—日本語教育を視野に入れて—、東アジア日本語・文学・文化国際フォーラム、2011 年 10 月 15 日、中国人民大学、
- ③ 池上嘉彦、言語研究における認知言語学の基本的な姿勢、東アジア日本語・文学・文化国際フォーラム、2011 年 10 月 15 日、中国人民大学、
- ④ 守屋三千代、池上嘉彦、日本語話者の〈事態把握〉の実態—児童・生徒に対する調査に基づいて、第 12 回日本認知言語学会、2011 年 9 月 18 日、奈良教育大学、
- ⑤ 守屋三千代、現代日本語のナル表現—「ナル文」と「ラレル文」のイメージ・スキーマ—、第 12 回日本認知言語学会、2011 年 9 月 17 日、奈良教育大学、
- ⑥ 池上嘉彦、"Subject-Object Merger" and "Subject-Object Contrast" in "Thinking for Speaking": A Typology of the Speaker's Preferred Types of Construal across Languages'、13<sup>th</sup> International Conference of the European Association for Japanese Studies、2011 年 8 月 25 日、Tallin University、
- ⑦ 守屋三千代、〈事態把握〉と語順をめぐる日中対照研究 第 3 回漢日対照言語学検討会、2011 年 8 月 17 日、中国杭州外国語大学、
- ⑧ 池上嘉彦、'Preferential Choice between Subjective and Objective Construal — A View from a Language where the Explicit Encoding of the Subject is not Obligatory'、The 11<sup>th</sup> International Cognitive Linguistics Conference、2011 年 7 月 15 日、Xi'an International Studies University、
- ⑨ 守屋三千代、日本語から日本語話者と日本文化を考える、東アジア日本研究フォーラム、2010 年 12 月 5 日、韓国済州島ロッテホテル、
- ⑩ 守屋三千代、徐愛紅、「雪国」の中国語訳から見る日中両言語の〈事態把握〉の差異—情景描写を中心に—、北京日本学研究会センター 25 周年記念シンポジウム、2010 年 10 月

17日、中国北京日本学研究中心、

① 高山京子、守屋三千代、国語科教育の課題—〈事態の主観的把握〉に基づく読解教育とPISA型読解教育の狭間で—、第11回日本認知言語学会全国大会、2010年9月12日、立教大学、

② 守屋三千代・徐一平・森山新・本多啓・テキメン・アイシェヌール・百留康晴・百留恵美子、ナル表現の諸相—様々な言語における「ナル表現」—、第11回日本認知言語学会全国大会、2010年9月12日、立教大学、

③ 池上嘉彦、「する」と「なる」の言語学、第3回トゥルク諸国日本語教育セミナー、2010年8月29日、トルコ・土日基金文化センター（アンカラ）、

④ 守屋三千代、日本語話者とトルコ話者の共通性はどこにあるか—〈事態把握〉と言語現象に注目して—、第3回トゥルク諸国日本語教育セミナー、2010年8月29日、トルコ・土日基金文化センター（アンカラ）、

⑤ 池上嘉彦、発話に先立つ〈事態把握〉の相対性—日本語話者好みの〈主観的（主客合一）把握をめぐって、IJSシンポジウム2010日本語研究の視点、2010年5月20日、神戸大学、

⑥ 守屋三千代、中国の日本語教科書の問題点と『総合日語』の自然さ—認知言語学〈事態把握〉から分析する—、中国全国高校日語教師高級研修会、2010年5月16日、北京郵電会議センター

⑦ 池上嘉彦、認知言語学と日本語教育、中国全国高校日語教師高級研修会、2010年5月16日、北京郵電会議センター

⑧ 池上嘉彦、Subject-Object Merger and Subject-Object Contrast in Construal:、The 4<sup>th</sup> Conference on Language, Discourse and Cognition、2010年5月1日、National Taiwan University、

⑨ 池上嘉彦、Preference between Subjective and Objective Construal: An Introductory Topic on the Basis of ‘Cognitive Grammar、English Society of Japan, 3<sup>rd</sup> International Spring Forum 2010、2010年4月24日、青山学院大学、

⑩ 池上嘉彦、認知言語学の現在、北京大学外国語学院言語学サロン、2010年3月12日、中国北京大学

⑪ 守屋三千代、〈事態把握〉の有効性、北京大学外国語学院言語学サロン、2010年3月12日、中国北京大学、

⑫ 守屋三千代、『総合日語』の理念と挑戦：認知言語学の〈事態把握〉を視野に入れて—、西安外国語大学国際シンポジウム、2009年11月21日、西安外国語大学、

⑬ 池上嘉彦、The Ego-centric Perspective and the Speaker/Writer’s Invisible presence in Text — ” Subjective

Construal” as a Translation Problem’、慶應英文学会大会シンポジウム「翻訳の誘惑・困惑・迷惑」2009年10月24日、慶應大学、

⑭ 池上嘉彦、認知言語学的転回とは何か、北京大学国際シンポジウム認知言語学の拓く日本語・日本語教育の展望、2009年10月17日、中国北京大学、

⑮ 守屋三千代、日本語を再考する—〈事態の主観的把握〉から見えるもの—、北京大学国際シンポジウム認知言語学の拓く日本語・日本語教育の展望、2009年10月17日、中国北京大学、

⑯ 池上嘉彦・守屋三千代・テキメン・アイシェヌール、「ナル表現再考—膠着語における事態の〈主観的把握〉の観点から—」、第10回日本認知言語学会全国大会、2009年9月26日、京都大学

⑰ 守屋三千代・テキメン・アイシェヌール・高山京子、「私たち」の語りと読み、第10回日本認知言語学会全国大会、2009年9月25日、京都大学、

⑱ 守屋三千代・熊倉千之・テキメン・アイシェヌール、認知言語学から見た日本語話者の『語り』と『読み』—川端康成「雪国」・村上春樹「アフターダーク」の翻訳と対照して—、日本語教育国際研究大会・豪州日本語教育国際研究大会、2009年7月14日、University of New South Wales, Australia、

(3) [図書] (計1件)

池上嘉彦、守屋三千代編著、ひつじ書房、『自然な日本語を教えるために—認知言語学をふまえて—』、2009年、227ページ

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

守屋 三千代 (MOROYA MICHIO)  
創価大学・文学部・教授  
研究者番号：30230163

### (2) 研究分担者

池上 嘉彦 (IKEGAMI YOSHIHIKO)  
昭和女子大学・文学研究科・特任教授  
研究者番号：90012327